

報道機関各位

寒冷海域におけるマナモコ稚仔の天敵が明らかに

～種苗放流後の生残率を高める手法への応用に期待～

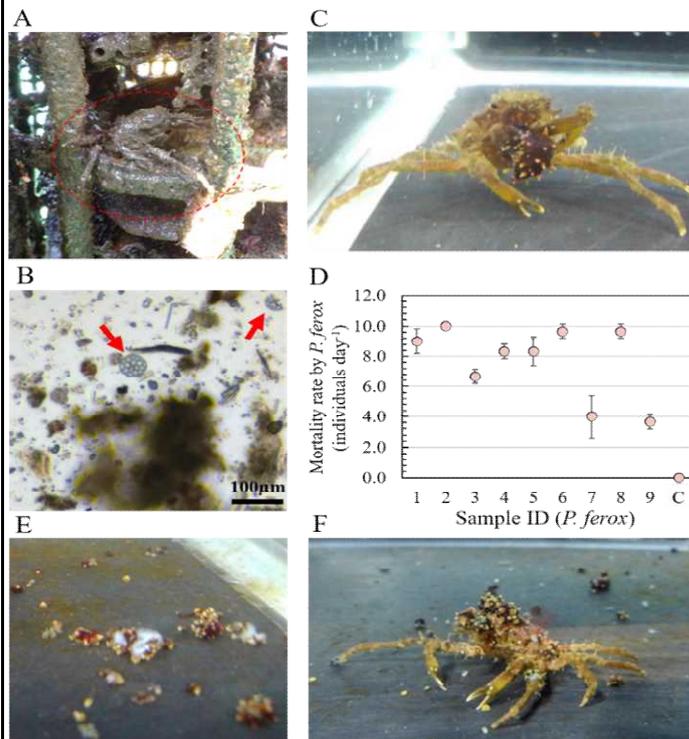
発表のポイント：

- ◆オオヨツハモガニ (*Pugettia ferox*) のマナモコ稚仔に対する捕食特性を明らかにし、これまで報告がある食害生物の中でも特に危険性が高いことを世界で初めて示した。
- ◆マナモコ種苗放流効果を向上させる新たな手法開発への応用が期待される。

発表概要：

マナモコ (*Apostichopus japonicus*) は、北海道から九州まで日本列島沿岸域に幅広く分布する水産有用種です。本種は2013年にICUNの絶滅危惧種に指定されるなど、資源量の減少が懸念されています。この度、寒地土木研究所水産土木チームの稲葉信晴研究員と北海道大学大学院水産科学研究院の松野孝平助教、そして海洋建設株式会社の穴口裕司氏らの研究グループは、道南の漁港におけるマナモコ種苗放流調査と室内飼育試験を通じて、大型のモガニ類であるオオヨツハモガニ (*Pugettia ferox*) がこれまで報告があるマナモコ稚仔の捕食者より食害生物としての危険性が高いことを世界で初めて明らかにしました。また、室内試験からオオヨツハモガニが切り刻んだマナモコの一部を利用しデコレーションすること、また、それらを短期的な食料保存目的で利用する可能性があることも示されました。これらの研究成果は、マナモコ資源管理や資源回復を目的として種苗放流が実施されている北海道沿岸をはじめとした地域において放流効果を高める手法を検討する上で重要な知見であると考えられ、今後の新たな放流手法に関する技術開発への応用が期待されます。本研究は、国際学術誌 *Frontier in Marine Science* に掲載されました。

論文タイトル：Predation of juvenile Japanese sea cucumber *Apostichopus japonicus* by kelp crab *Pugettia ferox*, DOI: 10.3389/fmars.2021.684989 (オンライン版 2021年6月22日05:00 BST [*現地時間])



(参考図) A. 礁内に多く出現したオオヨツハモガニ、B. 胃内要物中のマナモコ骨片、C. ナマコ稚仔の捕食、D. オオヨツハモガニによるナマコ稚仔の Mortality rate、E. 捕食後のナマコ稚仔の残骸、F. 切り刻んだマナモコでデコレーションするオオヨツハモガニ

※寒地土木研究所は、海洋建設株式会社、北海道大学大学院水産科学研究院とそれぞれ共同研究協定を締結しております。
・海洋建設株式会社
「漁港港湾における稚ナマコ生息基盤の開発に関する研究」(H28.8.1～R4.3.31)
・北海道大学大学院水産科学研究院
「稚ナマコの摂餌生態に関する研究」(H30.12.10～R4.3.31)

公開 一部公開 非公開

取材をご希望の方は、問い合わせ先に連絡願います。

問い合わせ先

国立研究開発法人 土木研究所 寒地土木研究所

水産土木チーム	上席研究員	マノ野 博行 ヒロユキ	TEL : 011-841-1695(直通)	260(内線)
企画室	参事	ヨコヤマ 直己 ナオキ	TEL : 011-841-1636(直通)	710(内線)

※本プレスリリースは、寒地土木研究所と北海道大学が共同で行うものです。